

フィリピン農村部における食のグローバル化の浸透と健康問題 ——食生活の変化と疾病——

平成 10 年入学
派遣先国：フィリピン
加川 真美

キーワード：米食の普及、食のグローバル化、生活習慣病

対象とする問題の概要

フィリピンは従来、ココナツやサトウキビ、バナナ、パイナップルなどの農産物の一大輸出国であった。だが、ココナツ油や砂糖の輸出は国際価格の低下により低迷し、より国内需要に振り向ける必要が生じた。ASEAN 各国は、1993 年から 2008 年までに域内関税率を 0～5%に引き下げることを決定した。関税率の低下により、強いアセアン諸国からフィリピンへ、競争力の弱い作物の輸入が増加した。その輸入作物の代表例の一つはコメである。これらの国際貿易事情は、フィリピンの食生活に甚大な影響をもたらした。都市部では、国内需要に振り向けられた砂糖や油脂の摂取が増え食生活の欧米化を呼び起こした。農村部での欧米化の浸透は都市に比べて僅少であるが、安い外国産米の流入により、従来はコメが主食ではなかった地域にも、急速に米飯が普及した。フィリピンにおける、急激な食のグローバル化は生活習慣病の患者の増加させている恐れが高い。

研究目的

現在フィリピンでは糖尿病や高血圧といった生活習慣病の増加が問題となりつつある。その原因として、都市住民の間で広まっているファストフード店をはじめとした欧米型食生活指向があげられる。それを裏付けるように都市住民の間では年々肥満傾向が強まり、現地の糖尿病団体などもそれを問題視している。だが、容易に医療機関にかかることが出来ない農村部での食生活に関する詳細なデータはほとんど無い。今回の調査の目的は農村部での農業生産、食生活の変化と疾病の傾向を知ることである。そのため、1999 年に調査した農村で、具体的に農村生活の変化を把握することにつとめた。

フィールドワークから得られた知見について

調査は、フィリピン東ネグロス州バレンシア町で行った。バレンシア町は町の中心部は東ネグロス州の州都から約 8 km と近いが、町の後背には火山がそびえ、町内の標高が 200m～800m と変化に富み、都市近郊から山間地といった変化が見られる。農村部での状況を知るために、町内でも標高の高い 5 か村のうち L 村と B 村という 2 つの村に的を絞って調査を行った。

この 2 村では、年齢に関わらず呼吸器疾患が多かった。呼吸器疾患の原因は、山間地ならではの激しい気温の変化だと思われる。現在、成人男女の間ではそれを上回る勢いで高血圧症が問題化している。この地域の主食は従来イモ・バナナ・トウモロコシであり、農民は副食としてイモの葉やズイキ、干魚を食べていた。だが、この 10 年で食生活と移動手段に大きな変化がみられた。1998 年の調査時には、コメは贅沢品とされ、米を常食にする世帯は少なかった。だが、今回の調査ではよく食べる主食はコメだ、と答える世帯が最も多かった。そのコメの大半はタイやベトナムから輸入された安価な精白米である。ミネラルやビタミンが多く含まれる玄米は全く食されていない。米食の増加に伴いイモとトウモロ

コシの生産が減少した。また先進国とのオルタナティブトレードが招いたバショウ科作物の密植により病害虫が発生したため、バナナ生産が極端に減少した。その代わりに現在では、精白米と油で揚げた塩辛い干魚の副食と言った非常に偏った食事の組み合わせが増加した。山村でもバイクに乗ることが日常化し、歩くことが 1999 年に比べ急減した。移動手段を持つことで市街地に出かける機会が増え、朝食に米国から輸入されたコムギを原料とする甘い菓子パンを常食する世帯も増加している。このようなグローバル化による食生活の変化と、運動量の急激な変化は、農村部でも将来的に都市型の糖尿病などの疾患に結びつくだろうことが予見されえた。

今後の展開・反省点

疾病の有病率は健康診断などの機会が増えるにつれ、結果的に増加する。現在のところ町立の保健所での無料の健康診断の内容は、身長・体重・血圧の検査及び医師の内診である。急激な体重減少や激しい疲労感を覚えた糖尿病を発症した者に対してのみ、医師の判断により尿糖の検査が行われる。先進国では境界型糖尿病や糖尿病予備軍を早期に見つけ出し、発症の予防が進められているが、現地の現状では困難である。調査者本人は医療関係者ではないため、潜在的な糖尿病患者を疫学的に掘り起こして調査することは難しい。それ故、今後も調査者が把握することが可能な、栄養学的に見た食生活の変化や、農業生産の変化、運動量の変化など、農村生活の変化に的を絞り調査を続けたい。今後、アジア地域では「貧者の糖尿」が問題となるであろうといわれている。農村地域の変化を丹念に拾い続ける事は、このような疾病を直接取り上げる研究にとって、重要なバックグラウンドとなろう。

参考文献

松林公蔵 2007「アジア各地の高齢者たちーフィールド医学の可能性」『ECOSOPHIA19』 56-59